京大東アジアセンターニュースレター　第418号

京都大学経済学研究科東アジア経済研究センター　2012年5月14日

目次

==========

○ 東アジア経済研究センター設立10周年記念シンポジウムのお知らせ
○ 中国経済研究会のお知らせ
○ 「討論・アジア経済」セミナーについて
○ アジア中古車流通研究会の設立について
○ バングラデシュ短信 ： ２０１２年 ４月下旬
○ ミャンマー短信 ： ２０１２年 ４月下旬
○ ネパール紀行
○ 「重慶の薄熙来」がしようとしたこと
○ 【中国経済最新統計】

主催：京都大学東アジア経済研究センター
後援：京都大学東アジア経済研究センター協力会

東アジア経済研究センター設立10周年記念シンポジウム

歴史からみた東アジア

―長い時間軸による示唆―

日時：2012年7月9日(月) 13時
会場：京都大学百周年時計台記念館国際交流ホール

13:00～13:10
挨拶 京都大学大学院経済学研究科長　植田和弘

第１部
13:10～14:40
記念講演（日本語使用）
　アンドルー・ゴードン（米国ハーバード大学教授）
　　「日本近現代史と東アジア」（仮題）

第２部
15:00～17:00
研究報告 「150年間の経済史と現代東アジア」
　堀 和生（京都大学教授）「近現代世界における東アジア経済」
　木越義則（関西大学講師）「歴史からみる中国市場経済」

17:20-18:50
懇親会

連絡先
〒606-8501 京都市左京区吉田本町　京都大学経済学部 堀 和生
Tel: 075-753-3438　fax: 075-753-3492　e-mail: hori@econ.kyoto-u.ac.jp

****

「中国経済研究会」のお知らせ

2012年度第2回（通算第26回）の中国経済研究会は下記の要領で開催することになりました。今回は報告者の現地訪問を交えながら、ブータンが提唱し、世界的に注目されている「国民総幸福量（Gross National Happiness）について参加者の皆さんと一緒に考えていきたいと思います。大勢の方のご参加をお待ちしております。

記

時　間：2012年5月22日（火）16:30－18:00
場　所：京都大学吉田キャンパス・法経済学部東館・地下1階みずほホールⅠ、Ⅱ
報告者：劉徳強（京都大学経済学研究科・地球環境学堂教授）
テーマ：「国民総幸福量（GNH）を追求するブータンの理念と現実
　　―ブータンの挑戦と中国への示唆―」

注：本研究会は原則として授業期間中の毎月第3火曜日に行います。2012年度における開催（及び予定）日は以下の通りです。
　前期：4月17日（火）、5月22日（火）、6月19日（火）、7月17日（火）
　後期：10月16日（火）、11月20日（火）、12月18日（火）、1月15日（火）
（この件に関するお問い合わせは劉徳強（liu@econ.kyoto-u.ac.jp）までお願いします。なお、研究会終了後、有志による懇親会が予定されています。）

****

「討論・アジア経済」セミナーについて

この度，東アジア経済研究センターでは，アジアで生起し，論争の対象となっている経済問題について，専門家の方から解説のみならず，問題の解決の方向をも御提案いただき，じっくりと議論する「討論・アジア経済」セミナーを始めることとなりました。多くの方のご参加をお待ちしております。

「討論・アジア経済」セミナー（第１回）

＜東アジア経済研究センターの政策提言＞
論点提起者：宇野輝　京都大学経済学部特任教授
（東アジア経済研究センター協力会理事）
討論点：なぜ東アジアに向かわざるを得ないのか？
－財政再建と官製金融そして経済成長と人口問題－

2012 年 5 月 19 日(土)15 時　京都会場：京都大学法経総合研究棟8階リフレッシュルーム
2012 年 7 月 21 日(土)15 時　東京会場：京都大学東京オフィス（品川インターシティA棟）

****

アジア中古車流通研究会の設立について

2012 年 5 月 1 日

近年，日本国内の自動車流通にかかわる新車ディーラーや総合商社，オークション会社，中古車販売会社などが，アジアに進出するケースが増大している。昨年もインドネシア・ジャカルタや中国・蘇州にオークション会社が進出するなど，アジアのほとんどに国に日本国内の自動車流通関連企業が現地法人を設立している。こうした状況の中で，京都大学東アジア経済研究センターは「アジア中古車流通研究会」を設立することとした。その目的は，アジア地域に進出している（あるいはこれから進出しようとしている）自動車メーカー，新車ディーラー，総合商社，オークション会社，保険会社，ローン会社，リース・レンタカー会社，中古車輸出会社，中古車販売会社などに参加していただき，当該領域を専門とする大学研究者も加わり，様々な問題を多面的に議論し，また情報交換をしていく場とすることである。

名称　京都大学東アジア経済研究センター・アジア中古車流通研究会
目的　アジア各国における中古車流通の近代化と日系企業の現地進出支援のための情報交換
開催　年 4 回，京都大学吉田キャンパスおよび京都大学東京オフィスで開催。
　　第四・土曜日の 13 時～17 時 30 分を予定。
参加資格　京都大学東アジア経済研究センター協力会の会員であること（年間会費　個人 1 万円・法人 10

万円　いずれでも可）

当面，今年度の重点課題を下記の 3 点におく。
①アジアの新興国中古車取引における不正情報，詐欺，メーター巻き戻し，脱税，盗難車販売などを正常化，近代化していく道を探る。
②日本のオークションシステムの新興国での活用の道を探る。
③海外の新車ディーラーにおける新車購入顧客保有車の下取とバリューチェーンの拡大。
第 1 回の研究会は下記のように 5 月 26 日に京都大学で開催します。お問い合せは東アジア経済研究センターの塩地（shioji@econ.kyoto-u.ac.jp）までお願いします。

第1回 アジア中古車流通研究会

主催 ： 京都大学東アジア経済研究センター

後援 ： 京都大学東アジア経済研究センター協力会

2012 年 5 月 26 日(土) 13 時

於 ： 京都大学法経総合研究棟地下 1 階 みずほホール

司会　大阪商業大学総合経営学部 教授 孫 飛舟

御挨拶

13:00-13:20
京都大学東アジア経済研究センター長　塩地 洋
京都大学東アジア経済研究センター協力会副会長　大森 經徳

1. 報告

13:20-15:20
塩地 洋（京都大学大学院経済学研究科 教授）
中古車流通の発展度と情報の非対称性
－中国の中古車流通の問題点と改革の方向の検討―

2. 研究会の今後の運営について

15:30-17:30
□参加者自己紹介と研究会に対する要望
□研究会日程

終了後　懇親会

お申し込みは，塩地shioji@econ.kyoto-u.ac.jpまでメールをお送りください。懇親会出欠の連絡もお願いします。なおこの研究会は京都大学東アジア経済研究センター協力会の法人会員･個人会員のみが参加できるクローズドな研究会です。非会員で参加希望の方は塩地まで協力会への入会方法をお問い合わせください。

****

バングラデシュ短信 ： 2012年 4月下旬

08. MAY. 12
中小企業家同友会上海倶楽部代表
東アジアセンター外部研究員（協力会理事）
小島正憲

1. 国際通貨基金、バングラデシュへ10億ドルの融資検討

国際通貨基金において、バングラデシュへの 10 億ドルのローンが検討されている。財務省職員の話によると、もしも会議において承認されれば、拡大クレジット給与ファシリティ(ECF/ the loans under Extended Credit Facility)は継続的なものとなり 1 億 6700 万ドルが、現会計年度中にも利用可能となるようだ。ECF は、低賃金の国々への中期経済支援の一環であった国際通貨基金の貧困削減成長ファシリティ(PRGF)の後を継いだものだ。そして、経済活動へのより高度なアクセスや優遇条件、また、もっと融通性のある計画案や合理化された融資条件などを提供する。ECF は金利 0%だが、貸付金は 10 年以内に返済しなければならない。

財務大臣であるAMA Muhith氏は、「これからの3年間、政府がプログラムのもとどんな改革を行っていくかについて、国際通貨基金に対してすでにその詳細を示している」と話している。財務省職員の話では、過去3年間の財務省による政策発表の中に組み込まれていた改革案は、国際通貨基金に送られた経済・金融政策に関する覚書のなかに含まれている。そのプログラムのもと、政府は12月までに11項目を実行するとの公約をしたが、その中には石油の小売価格に関して自動価格決定方式を採用することも含んでいる。同氏は「もし国際市場において燃料価格が変動した場合にも増減の範囲によって価格が小売段階で調整できるようにする為、政府は基準を設けるだろう」と述べた。財務省職員は「もし国際価格が10パーセントのアップあるいは10パーセントのダウンをした場合、国内の小売段階での価格調整もあるだろう」と述べた。プログラムのもと、12月までに実行されなくてはならない項目の中には、Dhaka and Chittagong bourses の株式会社化なども含まれている。

2. 新しい商業系銀行、9行が認可

2012年の春、バングラデシュ銀行は、新たに9つの商業系銀行(うち3つは非居住バングラデシュ人、6つは地元スポンサー)を承認した。銀行ライセンスは2000～2001年に発行されたのが最後だが、バングラデシュ経済は金融サービスの需要の高まりとともに、以下のような多様な発展をしてきた。

- 過去10年間(2000-2001年～2010-2011年)の名目GDPは3倍以上の成長を見せ、2兆5355億タカから7兆8750億タカとなった。
- 2010-2011年の1人あたり国民所得は、2000-2001年の374USドルから大きく増えて818USドルとなった。
- 外貨保有高も13億USドルから109億1千万USドルとなった。
- 輸出収入は64億7千万USドルから229億1千万ドルとなった。
- 輸入決済は2000-2001年93億1千万USドルから、2010-2011年336億6千万USドルになった。
- 全会計年度中の給与所得者の送金額が2000-2001年の25億USドルから増えて116億5千万USドルとなった。

バングラデシュにおいては、経済が成長し銀行システムがより競合的になっていく一方で、人口の45パーセントがいまだ預金をもっていないと言うのも事実である。支店ごとの人口(21065人と大人1000人あたりの借入金勘定の割合:42人)は、バングラデシュにおける公的金融セクターのアウトリーチが、インド(1支店あたり14485人、1000人中1241人の借入金勘定)やパキスタン(1支店あたり20340人、1000人中47人の借入金勘定)よりも低いことを示している。

新しい銀行による資本注入は、法人部門拡大の信用ニーズを満たすための銀行システムのキャパシティを増やすことになる。また新しい銀行の参入は 既存のシンジゲートの資源基盤を増やし、それにより、より大きなローンが投資や雇用創出を行うようになる。新たな非居住バングラデシュ人による銀行に持ち込まれた外国為替と外国為替持ち高の預金が、国の支払いのバランスを高めることになる。また、こういった銀行の経営が現地の銀行部門にデモンストレーション効果をもたらし彼らの助けとなることもあるかもしれない。新たな銀行の参入は、銀行部門における競争を高め、金融サービスの質を上げることになる。また、拡大する経済のなかで伸びゆく借入需要を満たすよう、促進されていくことにもなる。さらに、新しい銀行が地方と都市に1対1の割合で新支店をオープンすれば、地方の銀行の数を増やして、経済的一体性を広めることになる。

3. 3月のインフレは13. 96%、最高値を更新

バングラデシュ政府統計局によると、食料品以外の分野におけるインフレーションが3月、13.96パーセントという最高値を記録した。3月のインフレは10.1パーセントで、2月の10.43パーセントよりも0.33パーセントダウンしている。食品部門のインフレもわずかに下がっており、2月の8.92パーセントから3月には8.28パーセントとなっている。非食品インフレは2月が13.57パーセントだった。「香辛料、食用油の値段は2月よりも3月のほうが安かった」と統計局のShajahan 氏は述べ、「しかし一方で、食料品以外の日用品、とくに衣料品や医療サービス、運輸、家具、それに家事や洗濯に必要なものなどの値段が上がっていて、それが(非食品分野の)インフレをまねいています」とも語った。統計局のMolla氏は、家賃や運輸コストの上昇が非食品インフレの原因だとしている。

BBCのデータによると、2011年4月から2012年3月までのインフレは平均で10.92パーセントだが、その前の年の同じ時期が8.36パーセントであった。今年の予算案のなかで政府は、平均インフレは7.5パーセントほどになると想定している。また非食品インフレは、都市部よりも農村部のほうが高くなっているようだ。郊外では非食品インフレは14パーセントを超えており、2月には13.57パーセント、3月には14.17パーセントを記録している。都市部では、3月の非食品インフレが13.42パーセントだった。通常、インフレは食料品の値段とともに上がる。しかし最近では非食品インフレが激しい上昇を見せている。これについての問いに、Shajahan氏は次のように答えている。「米の豊作が輸入減をまねいたのです。米をいままで蓄えていた人たちがいまそれを売っています。政府は米を1キロ24タカとして自由市場で売っています。そのため米の値段は下がりました。これが食品インフレに影響を与えているのです」。

またShajahan氏は、「次月(4月)以降から、2005～2006年の事業年度を使ってインフレの集計を行う」と話した。「私達は、インフラを計算する基準年として1995～96年の事業年度を使ってきており、それはすでに16～17年が経過している。新たな製品がマーケットにたくさん入ってきているので、これからは新たに422の製品を設定しインフレを把握

し決定していく」と彼は述べた。また「インフレ率を低く見せるために基準年を変更するのか」という質問に対して、BBC局長は「私たちは前に進まなくてはなりません。多くの人がこれを政治的意思でやっていると言っていますが、それは嘘です。私たちはインフレデータを新しいシステムと古いシステムの両方で発表します」と語った。

4. 3月の輸出はユーロ圏の債務危機の影響もあり、19.9 億ドル、0.15%の緩やかな成長

欧州債務危機の問題により、3 月のユーロ圏における輸出高は先月と比べて 0.15%という緩慢な成長を見せ 19.9 億ドルとなった。バングラデシュの輸出は過去何ヶ月間かに渡って低い成長率となっているが、原因としては主要輸出商品である既製衣料(織物とニットウェア)の需要が落ち込んだことにある。輸出振興局が昨日発表したデータによると、3 月の輸出は、月間目標にあと 15.38%届いておらず、同じく 2 月も 7.97%足りていなかった。3 月の目標は 23 億 4 千万ドルだった。決算は 1 年前の同月と比べて、今年の 3 月は 7.23%落ちた。

データによれば、7 月～3 月の輸出は去年の会計年度の同時期と比べると、10.39%の成長を見せ 178 億 9 千万ドルに到達している。去年の同時期 7 月～3 月よりも、バングラデシュのニットウェア輸出は 5.92%伸びて 70 億ドルとなり、同じく織物は 19.24%伸びて 71 億ドルとなった。商務省の秘書である Monoj Kumar Roy 氏は、「ユーロ圏における債務危機が、輸出の伸び悩みの 1 番の要因である。私たちは輸出目標を達成できないでしょう。しかし会計年度末には 12%以上の成長率を出せるでしょう。他国からバングラデシュへとオーダーがシフトしていくのに従って、輸出は次の数ヶ月で回復するでしょう」と述べた。

商務部は今会計年度の初めに輸出目標を 265 億ドルに設定しており、これは 2010-2011 年度のものより 14.50%高い数値となっている。「その数値は無理な目標ではありませんでした。私たちは様々な要素を考慮して、この目標を設定したのです」と、バングラデシュ衣料品製造及び輸出協会の会長である Nasir Uddin Chowdhury 氏は述べ、「服飾品の輸出が活発になければ、年度末、この目標を達成できることはできないかもしれない」とも付け加えた。また「EU のオーダーが欧州債務危機が原因で落ち込んでいる」と彼は話す。バングラデシュニットウェア製造及び輸出協会の AKM Salim Osman 氏は、「製品のコストが上がっているにも関わらず、工場の生産力は高くなってはいない。ガスと電気の供給が不十分なせいで、我々がもっている能力のうち 40 パーセントほどしか発揮できていない」と述べた。

5. 全ての納税者番号を持つ人々は、次年度から税の最低額を収める必要がでてくるかもしれない

AMA Muhith 財務大臣は、「次年度より全ての納税番号所有者(TIN)は、税の最低額を支払わなければいけない」という可能性を示唆した。「現在、260 万人の TIN 所有者が存在するが、しかし 80 万人しか納税していない。私の意見は、もちろん全員が支払うべきだ、と言う事だ」と同大臣は報道陣に述べた。また「2012～2013 年に最低限の納税規定が実施されるのか」との問いに、「多分」と回答している。さらに「私の焦点は、国内の資源の活用と、脱税を阻止することだ。バングラデシュはもはや 1984 年当時や 2008 年頃のバングラデシュとは違う」とも述べた。

6. 駐米大使が、衣類にかかる米国の輸入関税を免税にするよう催促

バングラデシュ駐米大使は、米国のバイヤーにより輸入された既製の衣類にかかる関税を廃止するイニシアチブを実施するように、議会に要求した。Akramul Qader 駐米大使はワシントンにて行われたバングラデシュ・アメリカ外交 40 周年を記念する会にて、米国のバングラデシュ大使館のメディア声明として述べた。バングラデシュ(後発開発途上国)は、米国市場への輸出に際して、約 16 パーセントの関税義務に直面している。大使は、両国の関係はお互いにとって有益であり、よって両国はより結束を強めて、協力していくべきだと述べた。

7. 政府は、インドとの綿の取引を求めている

潤滑な供給を確保する為、バングラデシュはインドから 150 万ベイル/年の綿花の輸入を模索している。Bangladesh Tariff Commission(BTC)の Mozibur Rahman 委員長は、「もしインドが同意すれば、それは政府ではなくプライベート部門が輸入をすることになるだろう」と述べた。バングラデシュの紡績産業はインド綿に大きく依存している。バングラデシュ政府は、インド人の Textile Minister の Anand Sharma 氏(5 月 5 日にバングラデシュを訪れる予定)と会談をする。インドは世界第 2 位の綿花の供給元であるが、3 月 5 日に国内のマーケットを優先させる為に輸出を禁止した。

近年、バングラデシュのインド綿に対する依存度が上昇しており、紡績業界はリードタイムや搬送費のカットを求めるようになってきていた。2011～2012 年のバングラデシュでの綿花の消費量は 350 万ベイルであるが、2010～2011 年からは 5.5%減少していると米国農務省がレポートで述べている。続けて、Bloomberg 報告書によると、2012～2013 年の消費量は 360 万ベイルに届くのではないか、と予測している。インドは 100 万ベイルの綿花の輸出を昨日許可し、4 月 17 日までに 90 万ベイルの輸出の予定である。

以上

****

ミャンマー短信 ： 2012年 4月下旬

08. MAY. 12
中小企業家同友会上海倶楽部代表
東アジアセンター外部研究員（協力会理事）
小島正憲

1. NLD 政党、連休明けの4月23日の国会再開時に欠席

理由は国会出席時に、国会議員達が、「憲法を守り、従います」という証言をしなければならないというルールであり、NLD 政党がそれを拒んだため。NLD 政党は憲法を現実状態に合わせて改正していきたいという方針のため、「憲法を守り、従います」という言葉の代わりに、「憲法を守ります」という証言ならば了承するということで、国会許可を待っていたが、開会時までに許可が出ず、前回の新年初回目の国会には欠席となった。その後の交渉でも、結局、変更はできず、 NLD 政党も国会の説明に同意し、5／02から開かれる国会には出席することに決定。

2. 国連の事務総長、少数民族支援発言

4／29ミャンマー国内メディアとの記者会見で国連の事務総長は、ミャンマー政府とカチン武装グループとの内戦の停戦に向けての交渉に際して、技術的援助等が必要ならば、金銭を含めて援助していく、また難民援助をしっかりやっていけるよう努力していきたいと発言。なおカチン州では2011年6月から内戦が始まりずっと続いている。今年4月の連休前からところどころで内戦が起きて地元を捨てて、中国などに逃げる人が増え続けている状況。そろそろ雨季に入ろうとしているので難民援助は緊急に必要な状況である。内戦から10ヶ月掛かった今では難民数は8万人近くになっている。残念ながら、最近、マンダレー・ミィッキィーナー行きの列車線路で爆発事件があり、爆弾を仕掛けたのはカチン武装グループといわれている。現在この路線は一時運行をストップしている。

また事務総長は、ミャンマー政府がカレン族と平和条約等を結ぶ事ができたことを、大歓迎するとも発言。さらにミャンマーに対する関係国の経済制裁に関して、早期に解除するよう記者会見を通じて各国へメッセージを送った。

3. ミャンマー国立中心銀行、外貨規制を若干緩和

ミャンマー国立中心銀行、外貨規制を若干緩和の方向。中でも、現在両替可能な17カウンターでは AccountTransfer が 1 回のみに限定されていたが、5/01より回数無制限、また手数料が今まで2%であったが、無料となった。

4. ビジネスビザの取得が、ミャンマー入国時に可能になる

ビジネスビザがミャンマー入国時に、空港で取得可能となった。また滞在期間もこれまでの21日間から70日間に延長。この制度は6／01からスタートし、続行する予定で、前回のように途中で停止することはないとのこと。ただし申請費として、40USDが必要。

5. 電力不足でマンダレーの中小企業、操業困難

マンダレー工業地区では、連休明けより停電がもっと激しくなり、夕方5時から11時まで停電。その他の時間帯にも、頻繁に停電があり、中小企業は操業ができない状態に陥っている。

6. 米国 GE 社から、発電機4台を借用

テイン・セイン大統領はヤンゴン市全体を24時間無停電市にしていくため、米国GE社から発電機4台をレンタルすることに決定した。現在、ヤンゴンへの外資企業の誘致を積極的に行っているが、電力不足のためなかなか実現しないことから、この決定となった。大統領の日本訪問時にも日本政府と発電所2個所の設立に同意したが、その稼働には早くても1年半は掛かる。また現在海外へ売り出している電力は2016年にならないと国内需要にまわせない状態。

7. ダウェイ工業団地プロジェクトは予定通り進行

最近、国際メディア等で「ダウェイ工業地区プロジェクトが停止」という報道が流れたが、それは不正確である。実際は担当者の発言 《FINANCE CLOSE》の 《CLOSE》のみを解釈して報道が広がっただけである。

8. 4月末の外貨為替レート

1ドル＝815MMK～829MMK　　1ユーロ＝1070MMK～1088MMK　　1元＝123MMK～126MMK

以上

****

ネパール紀行

11. MAY. 12
中小企業家同友会上海倶楽部代表
東アジアセンター外部研究員（協力会理事）
小島正憲

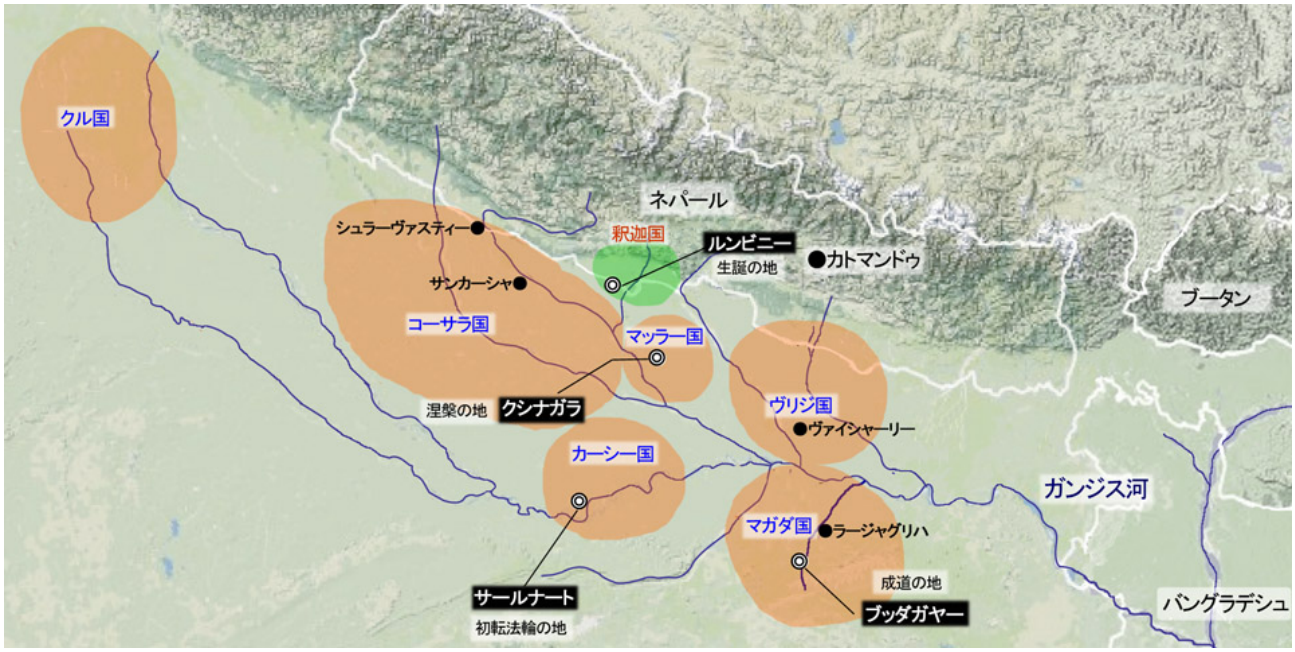
※ 2. がネパール紀行の本文であり、1. と3. は私の「世迷い話」なので、読み飛ばしてもらって結構である。

1. 中国断筆と気分転換

4月某日、故あって、私は中国関連の断筆を決断した。しかしその意志に反して、依然として身体は中国という言葉に条件反射を繰り返し、無駄な抵抗を続けた。朝刊を手に取れば中国関連の記事を目で追いすぐにハサミで切り抜こうする、自室に入れば反射的に書棚の中国関連本に目が行き雑感が頭の中を駆けめぐる、気休めにテレビを見てもすぐに中国関連情報に目を血走らせる、街を歩いても足は自然に書店の中国関連本コーナーへ向かってしまう、夜寝ていても次の中国分析の原稿の案が浮かんでくる。だが、次の瞬間、心はその全ての行為が無意味なものであることに気付く。そして心を猛烈な虚しさが襲う。その後数日間、私の心と身体は分裂、葛藤状態に陥ってしまい、思考停止、行動停止、つまり私は腑抜けに近い状態となり果ててしまった。

今から約4年前、私はきっぱり社長をやめ、それまでの金儲けビジネスとは無関係の道に踏み込んだ。もともと私は、大学時代に中国経済を専攻し、その後、長く中国ビジネスに関わってきたので、定年後は中国関係の情報発信やコンサルティングで、日本人の役に立とうと考えていた。そのため7年前に中小企業家同友会の上海倶楽部を結成し、活動の場も準備しておいた。退職後私は、ただちに中国の暴動や重大な事件、特徴的な出来事などの情報を追い、中国全土をくまなく歩き、その検証結果を発信してきた。また新規に発刊される数多くの中国関係の本を読み込み、すぐに雑感を書いてきた。さらに自分なりの中国経済分析などを中心に小論も発表してきた。昨年からは、中国をマクロ的に見る必要性と、同時に独善的になるのを防ぐために、現代中国情勢研究会を主宰し、毎月1回、多くの先生方に識見を披露していただき、しっかり勉強をすることにしてきた。その結果、私の定年後の人生は、そのすべてが中国一色で塗りつぶされ、現役時代よりも多忙をきわめることになった。そこまで、私の人生計画は予定通り順調に進行していた。

自らの決断だから仕方がないとはいうものの、ある日突然、私は無計画という暗闇に落ち込んでしまった。それから約10日後、私はこのままでは自分がうつ病になってしまうと思い、とにかくまず身体を動かそうと考えた。手始めに数百冊の中国関係の書籍を書棚から一掃することにした。さすがにそれらを古本回収業者に手渡す気にはならなかったので、ダンボール箱に詰め込み、倉庫まで運んで積み上げた。ただし、日中の死生観比較のために、買い集めておいた仏教や老人関係の一群の書だけは、そのまま書棚に残した。なぜなら私は95歳の母親を抱えており、目下、



老老介護の身の上であり、母親の老いと自分自身の老いに直面しており、それらを読む必要性に迫られていたからである。翌日から私は、まず仏教関係の書を読み始めた。そしてすぐに、私はブッダの誕生の地には足を運んだことがないことに気が付いた。私の心はネパールのルンビニーへ飛んだ。そして1週間後、私の身体は気分転換という大義名分を得て、ネパール行きの機上にあった。

※ブッダの本名はゴータマ・シッダールタであり、ブッダとはサンスクリット語で「真理に目覚めた人」という意味で、その音訳が仏陀、省略形が仏である。彼は釈迦族の出身であり、それゆえ釈迦仏、釈迦、お釈迦さま、釈迦牟尼世尊、釈尊とも尊称されている。本稿ではブッダという尊称を使用する。なおブッダはB.C.566～486（一説：463～383）。

2. ネパール紀行

今まで私は、恥ずかしながら、ネパールとはヒマラヤ山麓に位置する山岳国家だと思っていた。ところが、今回訪れたブッダ生誕の地のルンビニーは、田畑が見渡すかぎり広がる平野であった。ネパールは、このような肥沃な大地で国土の17％が占められており、それはタライ平原と呼ばれている。首都のカトマンドゥは、そのタライ平原からマーバーラタ山脈に分け入った盆地にある。そして観光地として有名なヒマラヤ山脈へと続いている。

ブッダの生誕地のルンビニーはタライ平原の中央あたりに位置しており、インド国境に接している。カトマンドゥからはプロペラ機で30分ほどのバイラワ空港に飛び、そこから車で30分ほど西に走った地点にある。ルンビニーからさらに西へ約30kmのティラウラコットに、若き時代のブッダが住んでいたカピラバストゥ王宮がある。ルンビニーから東へ約60kmの地点に、ブッダの母や妻の出身地のデーブダハという村がある。ネパール側の主要な仏蹟はその3個所である。今回はそれを入念に見て回ってきたので、自説とともに紹介する。なお、5月上旬のタライ平原はきわめて暑く、昼中は40度を超え、午前11時から午後4時までは昼寝タイムにせざるを得なかった。またカトマンドゥの周辺は世界遺産の宝庫であり、それぞれに興味深いが、今回はその中からキルティプルを紹介する。

A. ティラウラコット ： カピラバストゥ王宮

①「ブッダは、なぜカピラバストゥ王宮を去ったのか」

ブッダは29歳のとき、次期釈迦国王の座を捨て、しかも妻子を置き去りにして、生まれ育ったカピラバストゥ王宮の東門から出て行ってしまった。ひろさちや氏は、このブッダの行為を、「彼がブッダになったところから振り返ってみれば、彼は出家をしたからブッダになれたのであり、そして彼はブッダになるために出家をしたことになります。しかしそれは結果論です。もしも彼がブッダになれなかったとしたら、彼の出家という行為は無意味な行為です。それはたんなる“家出”でしかありません。現代流に言えば、それは“蒸発”なのです」と分析している（「ブッダの教えがよくわかる」：日文新書）。私はこの、「ブッダは“出家”したのではなく、“家出”したのであり、“蒸発”したのである」という見解に同感である。

一般には、ブッダがカピラバストゥ王宮を“蒸発”した動機として「四門出遊」説が信じられている。「四門出遊」とは、王宮の中で大切に育てられ世情に疎かったブッダが、成長して初めて東の門から王宮を出たとき、そこで老人に出会い、その醜さに驚くことから始まる。ブッダが驚いたのは、それまで若くて健康で美しい人間しか見たことがなかったからである。次に南の門から出て苦しみもがく病人に出会い衝撃を受け、西の門から出て葬列に出くわし嘆き悲しむ人々を目にして愕然とし、人間は「老・病・死」の苦しみから、決して逃れられないのだと知り、深い憂鬱に包まれる。しかし最後に北の門から出たとき、そこで修行者と出会い、世事を超越し悟りきったその姿に心を打たれ、全てを捨て、修行の道に進むことを決意する。これが現代にまで語り継がれているブッダ“蒸発”の動機の公式見解である。

《 カピラバストゥ王宮の東門 》

ひろさちや氏は、この「四門出遊」物語の出典を「五分律」であると書いている。同時にそれは後世の創作であるとも言い、「これを“蒸発”の動機とするのは無理だろうが、その核になったような事件はあっただろう」と推測している。また仏教学者の宮元啓一氏は、「最初期から仏教が繰り返し強調したのが老いと病と死の苦しみという避けがたい事実であったことを考えれば、この“四門出遊”のエピソードは、釈尊が出家となることを決意したいきさつを、集約して述べたものだといえる。実際にはいろいろあったということなのであろうが、その意味で、このエピソードは含蓄に富んでおり、傾聴に値する」（「仏教誕生」 講談社学術文庫）と書いている。しかし私は、ブッダの“蒸発”の動機を、この「四門出遊」だけで説明するには、かなりの無理があり、決定打にはならないと考えている。ちなみにブッダの“蒸発”について、最近では、「子どもと離れたかったのではないか」とか、「女嫌いになったからではないか」という説も登場している。

②「ブッダは、なぜ子を捨てたのか」 山折哲雄著　集英社新書

この本で宗教学者の山折氏は、「シッダールタ、決断の理由」として、「家を出るか、とどまるか、その迷いの中に彼はいたのだろう。この迷いの気持ちは、普通に考えれば、心ならずも犯してしまった自分の行為に対する後悔と反省の中から出てきたものだったかもしれない。彼の胸のうちには、かなり以前から、青春期の理想のようなものが芽生え、それがしだいに成長していた。その理想を実現するためには、今をおいてほかにはない、今を逃すとその機会はふたたび訪れることはないーそういう怖れが胸中にきざし、それが最後の決断へと彼を駆り立てたのかもしれない。性愛に没頭していた生活に対する自己嫌悪、といってもいい。その結果として罪の子が誕生した。それが彼の意識を苦しめ、その前途を脅かすことになった、という物語の筋書きである。愛欲こそ苦の根源、という哲学がしだいに説かれるようになったということだ」と書いている。

さらに山折氏は、「ともかく、シッダールタがはじめてのわが子に“ラーフラ（悪魔という意味）”という名をつけたことの意味をまず明らかにしなければならない。悟りを開く以前の彼に、はたしてそのような明確な意図があったのかどうか、疑えばいくらでも疑うことができる。しかしそうではあっても、“ラーフラ”誕生の伝承がそのようなシッダールタによる命名の形を考え出したということには、それなりに現実的な根拠があったのだろう。ここで第一に考えられるのは、悪魔と命名することで、シッダールタがわが子を捨てたということだ。生母を失って捨て子の運命におかれていた父が、こんどは自分の子を捨て子の状態に追いやったということである。理不尽といえばあまりにも理不尽な人間ドラマである。そのような理不尽な運命を、知らず知らずのうちに引き寄せてしまったのだろうか。そもそも人間というものが、そのような運命の支配下にある存在であるということか」と、ラーフラ命名を分析している。

山折氏はこの本で、ラーフラを縦糸にしながら、ブッダの思想の解析を試みており、それは多いに参考になる。しかしながらラーフラの誕生をブッダの出家の理由とするのは、いささか無理なような気がする。

③「ブッダはなぜ女嫌いになったのか」 丘山万里子著　幻冬舎新書

この本で丘山氏は、女性の立場から、ブッダが出家した理由の一つを「女嫌いになった」ことではないかと推測し、以下のように書いている。「生まれてすぐに生母と別れ、愛への渇望を亡き母の妹である継母へと転写し、妃を迎えても癒されることのなかったブッダの青春は、“渇愛”そのものだった。渇愛とは、喉が渇いたときに必死で水を求めるような激しい欲望のことで、ブッダはそれを苦しみの根源とした。その欲望を断ち切るにはどうしたらよいのか。その苦しみから解放されるには、どうしたらよいのか。父王スッドーダナ、その妃マハーパジャーパティ、妃ヤショーダラーの間に張り巡らされる愛執に身を縛られ、何よりも自分自身の心の中に、渇愛と愛執を抱えたシッダールタが、そうした状況のいわば落とし子であるかのラーフラ誕生という現実を前に、ついに城を出奔してしまうのは、今風に言うなら、切れてしまったのだ」（P.164）。さらに丘山氏は、宮殿内でシッダールタのために楽器を奏で、歌い踊っていた美女たちが、眠りこけ、だらしない姿態をさらけだしているのを見て、はなはだしい嫌悪を感じたのであろうと語り、「ある者はよだれで体をぬらし、ある者は歯ぎしりをし、ある者はいびきをかき、ある者は寝言を言い、ある者は口を開け、ある者は着物をはだけ陰部を露わにしていた。王子は女たちのその姿を見て、ますます欲情をなくす」という経典からの一文を紹介し、ブッダの「出家の最後の決断は、女たちのあさましい姿、ということであろうか」と結んでいる。

しかしこの丘山氏の推測も、やはりブッダの「出家」という一大決断を説明する理由としては、いささか根拠が薄弱だと思う。男性の私には渇愛や愛執が、29歳にもなった妻子持ちの男の行動を決定する要因になるとは思えない。丘山氏が渇愛や愛執をことさらに取り上げるのには、丘山氏自身の中に、女性としての「愛に対するロマン」のようなものが強く存在しているからではないだろうかと思ってしまう。また男性の私ならば、たとえ美女たちの醜態を見たとしても、そこに「はなはだしい嫌悪」を感じることはなく、むしろ「ほほえましく」思うだろうし、それが「出家の最後の決断」になることは絶対にあり得ない。

④「ブッダは血みどろの権力闘争から脱出した」

ブッダが生きた当時のインドは、中国の春秋戦国時代に匹敵する動乱の時代であった。私は、ブッダの“蒸発”はその時代背景を抜きにしては語れないと考える。紀元前五世紀ごろ、水量豊かなガンジス河はその中流域に、安定した多量の米の収穫を保証した。この大量の米の余剰生産に支えられて、それらの地域は商業経済や手工業が盛んとなり、その中心地として巨大な都市が出現した。こうした都市が部族連合のような形態をとり、やがてマガダ国・コーサラ国などの強大な国家や釈迦国などのような小国を成立させていった。そしてこれらの国々は、血で血を洗う凄惨な弱肉強食の戦いを繰り返した。後にこの壮絶な時代は、歴史上、十六王国併立時代（紀元前6世紀～）と名付けられた。

ブッダの生まれ育った弱小国家の釈迦国が、この戦国時代を生き抜くことは容易ではなかった。もともと釈迦族は、南国のオッカーカ王の先妻の4人の娘と5人の息子が、王の後妻の王子への譲位によって、国を追われることになり、北の密林地帯に逃げ込んだことに、その起源を持つ。やがて9人はその血統の正しさを守るため、4人の王子は自分たちの4人の姉妹を娶り、その密林を切り開き、カピラバストゥ王宮を中心に釈迦国を建設した。彼らから数代を経て、釈迦国は弱小ながらもそれなりに繁栄し、やがてブッダの父、スッドーダナ王の時代となる（「シャカ族」 徳間書店より）。

この釈迦国はやがて隣国の強国、コーサラ国に攻められ、ブッダ生存中に釈迦族はみな殺しにされる。コーサラ国が釈迦国を攻め滅ぼしたのは、16歳のとき父王を殺し、王位を簒奪したヴィールダカが、その出生の秘密をめぐって、

釈迦国に大きな怨みを抱いていたからである。当時、コーサラ国と従属的な同盟関係にあった釈迦国が、コーサラ国から釈迦族の妃を迎えたいと申し込まれたため、釈迦国は美女ではあるが最下層の女を、釈迦族の血統の娘として偽って差し出し、その王妃に生まれた子がヴィールダカであった。長じて後、釈迦国の態度が自分に横柄なことを不思議に思ったヴィールダカは、その秘密を知り、自分を下女の子と蔑む釈迦族を攻めた。そしてブッダの3度にわたる諌めを振り切り、釈迦族を乳飲み子にいたるまで、みな殺しにしてしまった。この詳細については「ブッダが最後に伝えたかったこと」（川辺秀美著　詳伝社新書）をお読みいただきたい。

数年後、そのコーサラ国もマガダ国に攻め滅ばされる。このマガダ国の国王が、「王舎城の悲劇」で有名な阿闍世王（アジャータシャトル：B.C.491～459）である。阿闍世王は出生の秘密をめぐって、誕生してすぐに父のビンビサーラ王によって楼上から投げ落とされる。奇蹟的に助かり宮廷の女官たちに育てられた阿闍世王は、長じて権力を握った後、父王を城内に幽閉し餓死させようとする。阿闍世王の産みの母のイダイケは、息子に内緒で体に蜂蜜を塗り、父王のもとに通いそれを嘗めさせるが、やがて父王は餓死する。その後、阿闍世王はその罪を悔い、ブッダに帰依する。これが日本の浄土宗の法要で唱えられる「観無量寿経」の一節である。この詳細については「阿闍世王物語」（ひろさちや著　新潮社）をお読みいただきたい。その後、阿闍世王はその武力によって、ガンジス河中流域の諸国を征服、統一したが、自らも息子によって殺されたと伝えられている。

以上、私がブッダの生きた時代の血なまぐさい歴史を詳しく紹介したのは、この時代の肉親関係つまり父王、母、王子、王妃、兄弟などの関係が、複雑で、かつ血を血で洗うがごときものであったということを伝えたかったからである。古代インドに伝わる名著「実利論」（カウティリヤ著　岩波文庫　上・下）は、その修羅場を乗り切るための国王への指南書として書かれたものであり、それは中国の「韓非子」やイタリアの「君主論」をも、はるかに凌ぐものである。制作年代は紀元前4世紀と推測されており、ブッダの生存時期と大きく離れてはいない。「実利論」には、その全編にわたってスパイの使用法の詳しい解説が書いてある。そこには単純な間諜から、二重スパイ、集団おとり捜査まで実に細かく書き込んである。

その一節の「王子に対する警戒」には、「側近の人々、敵たち、そして何よりもまず妻妾や息子たちの危険から身を守ったときに、王は王国を守護することができる」と書いてあり、「息子の誕生の時から、王子たちを警戒しければならぬ。というのは、王子というものは、蟹と同様の性質で、生みの親を食ってしまうからである。父親は彼らに愛情を抱かぬうちに、沈黙の刑（謀殺）を加えるのがよい」と述べ、その具体的手法を続けて書いている。さらにその節は、「不遇の王子の行動」、「不遇の王子に対する処置」へと続く。

また「王宮に関する規定」には、「後宮にいる王は、老女たちが王妃を検査した後で、王妃と会うべきである。というのは、パドラセーナ王の弟は、王妃の部屋に潜伏して王を殺した。また、カールーシャ王の息子は、母の寝台に隠れて父王を殺した。カーシー国王の妃は、炒米に蜜だと称して毒をまぜ、王を殺した。同様に、毒を塗った足環によってヴァイランティヤ王を、帯の宝珠によってサウヴィーラ王を、鏡によってジャルータ王を、編髪に武器を隠してヴィドゥーラタ王を、それぞれの王妃が殺害した」と書いてあり、「絶対に独りで寝ること、なぜなら寝言から大事が漏れるから」とか、「オウムを飼ってはいけない。オウムの口から秘密がばれるから」とも付け加えられている。おもしろいことに、随所に「マングースを飼うこと。毒蛇から身を守るために」とも書かれている。

つまりブッダの生きたこの時代、王宮内では、父王、母、王妃、王子など、それぞれがお互いを信じることができず、常に疑いの目で見なければ生きていけなかったのである。そのような環境の中で育ったブッダも、父王や母や王妃を心底から信じることができなかったのではないだろうか。そのような時に自らの王子が誕生し、この愛らしき王子をも警戒しなければならぬ自分の環境に幻滅し、ブッダはこの空間からの脱出を決意したのだと、私は考える。ひろさちや氏は、それを「ブッダは徹頭徹尾、政治と決別したかった」と書いている。私は、「血で血を洗うがごときの殺戮空間からの脱出」、「血みどろの権力闘争からの逃避」、これがブッダの“蒸発”の真なる動機であると、考える。

中国の春秋戦国時代に諸子百家が誕生したように、インドでもこの時代に多くの思想が輩出され、教団が誕生した。ジャイナ教の典籍にはその数が362もあったと記されている。当然のことながら、仏教に先行する思想も多かった。“蒸発”後のブッダは、それらの思想や哲学を学び、修行する中で、仏教思想を確立したのである。

B．ルンビニー　：　ブッダ誕生の地

①「ブッダはなぜここで産まれたのか」

ブッダの母親のマーヤー夫人は、臨月近くになり、カピラバストゥ王宮を出て、デーブダハの実家に里帰りし出産する予定だった。その途中のルンビニーの森で休息を取っているとき急に産気づいた。マーヤー夫人がアショーカの大木の枝に右手をかけたとき、光明とともに王子が右脇から産まれた。産まれた子供はそのまま四方に7歩を運び、「天上天下、唯我独尊」と言ったという。

その真偽はともかく、私はその大木の下に立ち、「なぜマーヤー夫人が、この地で出産したのか、ブッダはなぜここで産まれたのか」という疑問を抱いた。“蒸発”の動機もさることながら、仏教誕生以来、だれ一人、そのことには疑問を抱いていない。実家で出産するというのが当時の風習であったのかもしれないが、それは王子（王女）誕生直後の修羅場をマーヤー夫人が避けようとしたからかもしれない。産まれた王子を誰かがすぐに安全な場所に運び去ったので、それが「7歩神話」として伝わったのかもしれない。いずれにせよ私は、「マーヤー夫人がなぜこの地でブッダを産んだのか」について考えてみるのも、仏教の原点を考える上で、大事なことではないかと思った。

《 ブッダ生誕の地 》

②「ルンビニー聖園」構想の理想と現実

現在、ルンビニーは世界遺産として登録されており、ネパール政府や国連のもとに「聖園」化が進められている。そのマスタープランは、1978年に日本の丹下健三氏が設計したものであり、それが右図である。南端にブッダ誕生の地点を配し、北端に日本山妙法寺の大ストゥーパ、それをまっすぐに伸びる運河がつなぎ、その両側に世界各国からの仏教寺院が林立、まさにそれはルンビニーを世界平和の象徴とするに十分な設計である。2008年にこの地を訪れた潘基文事務総長は、「私は仏陀の誕生の地である、この聖地の美しさと深い重要性に心打たれた。人生の現実に直面するため、あらゆる快適な環境から立ち去り、後に世界で最も大きな宗教の一つである仏教の創始者となった王子の、人生の旅路に感動した。国連の事務総長として、宗教、信念、文化、そして主義の違う人々の生活、哲学、和解が、繁栄し、育成され、成就されることを心から願う」と語っている。私も同感であり、聖園の「平和の火」の前で両手を合わせて、この地が世界平和の象徴となることを切に願った。

南端の聖園の中には、このルンビニーの地がブッダ誕生の地であることを証明する「マーカーストーン」や「アショカ王の石柱」があり、マーヤー夫人が出産時に手をかけたアショーカの大木がある。その大木の側で、仏教の僧侶が20人ほどのヒンドゥー教徒を相手に説法をしていた。ガイドさんに聞いてみると、この地に訪れる人にはインドからのヒンドゥー教徒も多く、この光景は珍しくはないという。しばらく私もその説法に聞きながら、彼らの様子をうかがってみたが、多くのヒンドゥー教徒は真剣に耳を傾けており、そこに私は、宗教の違いを乗り越えた静寂と、この聖園の重要性を感じた。

ところが林立している寺院を回り始めて、その私の静謐な心は無残にもかき乱されてしまった。もともと私は、このルンビニー園の地図を見たときに、「なぜここにドイツ寺やフランス寺、オーストリア寺があるのだろうか、それらの国には仏教徒はあまりいないはずなのに」と思っていた。実際にそれらの寺院に入ってみてその疑問は氷解した。ドイツ寺の中には、正面に大きなダライ・ラマ14世の写真が飾られており、オーストリア寺にはチベット仏教のゲルク派の創始者：ツォンカパの像が祀られてあった。フランス寺には物証はなかったが、庭に大きなマニ車がしつらえてあり、チベット仏教の寺院であることは明白であった。私はこの世界平和を希求する聖園に、わざわざ騒動を持ち込むような、これらの寺院の有様に辟易した。マーヤー聖堂の近くに、古くから小さなチベット寺院がある。私はこれで十分ではないかと思う。それが仏教本来の在り方ではないだろうか。ましてやそれらの欧州各国の寺院が敬虔な仏教徒の手で建てられたのではなく、異教徒の寄付で賄われていたとしたら、この聖地が宗教戦争の場所と化してしまうのではないか。

オーストリア寺の裏側に立派な中華寺がある。その沿道だけには土産物屋がたくさんあり、賑わっていた。私は思わず頬を弛ませ、それらに声援を送った。なお、中華寺の前には壮大な規模の韓国寺が建設中である。聖園の外側に、豪壮華麗なチベット寺院が建っている。正門が閉じられていたので脇の小門から入り、ガードマンに聞いてみると、現在、この寺には誰も住んでいないという。

C．デーブダハ ： ブッダの母、育ての母、妻の出身地 ： コーリヤ族の地

①「なぜブッダの産みの母、育ての母、妻が同じコーリヤ族なのか」

ルンビニーから北東へ60kmほどの場所に、ブッダの産みの母、育ての母、妻のコーリヤ族の居住地がある。その環境はカピラバストゥ王宮のあるティラウラコットとは明らかに違っており、周辺には森が多く、平野が少なく、かつてそこが密林であったことを想像させるような場所だった。

《 発掘中のコーリヤ族遺跡 》

かつて密林を切り開き、カピラバストゥ王宮を造り、釈迦国を建設した釈迦族は9人の兄弟姉妹であった。その一番上の王女がハンセン氏病を患ったため、その王女は単身で少し離れた場所を居住地と定めた。その森にはコールという薬草が生えており、それを食べた王女は健康を回復したので、そこを開拓し村を造った。やがてその地はコール・ナガラと呼ばれるようになり、その地に

住む人は、コーリヤ族と呼ばれるようになった。その後、もともと釈迦族とコーリヤ族は同族なので、子孫たちの間で婚姻関係が結ばれることになった。ブッダの母や妻の婚姻関係も、釈迦族とコーリヤ族の濃い血のつながりの中で行われた。ブッダの産みの母のマハーマーヤーデヴィーと、育ての母のプラジャーパティー・ゴータミーは、コーリヤ族のダンダパーニ王の妹である。釈迦国のジャセーナ王の娘アミターはコーリヤ族のダンダパーニ王の弟のスプラッブッダ・シャーキャ王に嫁ぎ、やがてブッダの妻になるヤショーダラーを産んだ。つまり弱小部族の釈迦族とコーリヤ族は、緊密な婚姻関係を結ぶことによって、その団結を固めていたのである。そのコーリヤ族も釈迦族の滅亡とともに、さらに北方のカトマンドゥ盆地に逃げ延びた。

②デーブダハの地は、発掘ブーム

現在、コーリヤ族の居住地は発掘ブームに沸いている。ティラウラコットやルンビニーが観光地化し、地元住民が潤っているのを知ったデーブダハの住民たちが、こぞってマーヤー夫人の居住跡などの発掘に躍起となっている。現在、それには4か所ほどが候補に上がっているが、まだ決め手になるような物証は発掘されていない。

D. キルティプル ： グルカ兵の戦跡

かつてネパールのグルカ兵は英軍に編入され、第2次世界大戦では日本軍とも戦い、その勇猛果敢さが恐れられていた。そのグルカ兵の闘いの痕跡があるというキルティプルに行ってみた。キルティプルはカトマンズから南西へ約5キロの地点にあり、小高い山に沿って開けている町である。12世紀頃からパタンの丘陵衛星都市として栄えたが、18世紀に山岳民族のグルカ族がカトマンドゥやパタンに攻め込んで行った際に、それらの都市がなかなか攻め落とせなかったため、周囲の丘陵衛星都市を攻める戦略に変更し、この地で大激戦が行われたという。グルカ族は、数年間にわたって3回の攻撃をかけたが、キルティプルの住民達にそのつど撃退され、総大将が戦死したり、グルカ族の王の弟が両目を射貫かれたり、王自身が刺し殺されそうになったという。そこでグルカ族は力攻めをあきらめ、兵糧・水攻めの戦略に変更し、この山全体を取り囲み、長期戦に持ち込んだ。さすがのキルティプルの住民達もこれには勝てず、ついに落城したのだという。キルティプルに行ってみると、山頂からはカトマンドゥ盆地が一望でき、そこは確かに戦略上の要衝であることがよくわかる。山の中腹にはバク・バイラヴ寺院（ヒンドゥー教）があり、立派な3層の屋根の下には、かつての闘いの時に使用された剣や盾がたくさん吊り下げられており、往時の激戦の名残を留めている。

その後グルカ族は、当時、ネパール全土にあった360余りの小国を統一し、グルカ王朝を建て、ネパール王国を建設した。19世紀に入って、イギリス軍はネパールと3度にわたる戦争を行い、ネパール兵の強さに驚いたという。和平後、イギリス軍はネパール兵を傭兵として自軍に取り込んだ。そのネパール兵たちは、ネパール各地の山岳民族を含んでいたが、その勇猛果敢さで名を馳せているグルカ兵と呼ばれることになった。なお、2005年現在、イギリス軍には約3600人のグルカ兵が所属している。ネパール人の若者がグルカ兵として雇用されるには、上位カーストの者でもかなりの狭き門であるが、下位カースト出身者には知力・体力などの厳しい試験があり、それに合格してもその後に、英語や格闘技の訓練が課せられている。

E. キルティプル ： 建築技師アルニコの記念館

キルティプル村の麓に、建築技師アルニコの記念館がある。建築技師であったネワール族のアルニコ(1244～1306年)は、中国の元の時代、時の皇帝フビライに請われて北京に赴き、寺院のストゥーパ（白塔）の建設の指導を行った。その寺院は北京市内西城区阜成門内大街に妙応寺として現存している。ことにアルニコが建てた白塔が名高く、この寺の別名を白塔寺ともいう。当時、アルニコはカトマンドゥからチベットのラサ、中国の青海省、甘粛省などを経て北京に辿り着いたという。この記念館には、その旅程図が掲げられている。その後、アルニコは北京に留まり、中国人女性と結婚し、中国でその生を全うした。その子孫の家系図も、この記念館に展示してある。

3. カンボジア・ミャンマー・バングラデシュへの方向転換

40度近い暑さの中、土埃にまみれて仏跡を駆け巡り、私は気分転換に成功し、余生に挑戦する気力を取り戻した。

私は昨年「アジア・アパレルものづくりネットワーク」を結成した。そこを舞台に、ひとまずカンボジア・ミャンマー・バングラデシュの情報収集と現場検証に走り回ることにする。それぞれに土地勘も人脈もある。ただし中国ほどの情報発信ができるか、読者各位の期待に応えることができるか、今のところ私には自信がない。それでも、私が人生の区切りにしている72歳まで、残すところあと7年、必死で全力疾走をしてみる。おそらくこの私の方向転換は、数年後、大きく評価されるのではないかと思っている。 …それまでに余命が尽きるかもしれないが。

以上

****

「重慶の薄熙来」がしようとしたこと

京都大学名誉教授・慶應義塾大学教授

以前のエッセイで書いたように今回の元重慶市党書記薄熙来氏の解任劇は直接には「権力闘争」の、本質的には「路線闘争」ないし諸社会集団(そのコアは階級)間の闘争の反映である。そのため、汚職や妻のイギリス人ビジネスマン死亡事件への関与といった薄熙来氏への嫌疑を議論することは重要ではない。中央で薄熙来氏に対立していた温家宝氏も薄熙来氏サイドから汚職の調査の対象となっていたというから、結局のところ、多少の汚職は誰にでもあり、そのうちの誰が追及されるかだけが問題となっている。さらにその上、『日本経済新聞』4 月 1 日付けによれば、この解任劇はアメリカの意向を反映しているとまで言われている。この真相を我々外国の研究者が知ることは到底できない。

しかし、もしそうであればあるほど、こうして対立する「両派」の「路線」たるものを知ることが重要になり、ここでのポイントは重慶の政治が良かったのか悪かったのか、ということになる。そして、実際、このレベルでの「反薄熙来キャンペーン」も進んでいるのでその検討から始めよう。『日本経済新聞』4 月 21 日付けは中国政府が重慶市の問題として財政赤字の累増問題を挙げている。低所得者向けの公営住宅の建設、イチョウ並木など緑化の推進をしたのはよいが、その支出が過大であったという趣旨である。この記事から関連する数字を抽出すると次のようになる(ただし、市総生産は別の統計から計算している)。成長に対する公共投資増への依存の高さが予想される。経済成長率の 2 倍以上で伸びているからである。

表　薄熙来治下の重慶財政と経済の推移

	2007 年	2011 年	増加率
公共投資	500 億元	2100 億元	4.2 倍
低所得者向け住宅	全期間　1000 億元		
緑化事業	全期間　400 億元		
財政赤字	約 330 億元	688 億元	約 2 倍
市総生産(指数)	1	1.79	1.79 倍
市管轄の国有企業資産	5800 億元	15200 億元	

したがって、この「反薄熙来キャンペーン」の文脈では、これが財政赤字を招いておりそれが問題だ、となるが、それでも薄熙来側から反論すると、①公共事業の増は中央の「西部大開発」の結果であり、それを進めたのは中央である、②重慶の場合はそれを低所得者用住宅建設と緑化に重点をおいた(全公共投資の数分の 1 か? 他にも市内交通の整備も重視していた)、③財政赤字の規模拡大は経済規模の規模拡大より少し大きいにすぎない、④たぶん政府規模の拡大と同じ比率にすぎない、となろう。この反論は『日本経済新聞』には書かれていないが、それでも財政赤字問題は重慶のみの問題ではないと述べている。

私はこの双方の理屈を理解することができる。中央にとどまらず、地方財政の赤字の累増は将来に日本やヨーロッパのような危機を起こす原因と必ずなるので、「持続可能」な社会、経済、財政を作る上で決定的な問題である。短期的利益を優先して大衆の支持のために財政赤字を累増させるのは現在の日本の民主党政権に等しく、戒められなければならない。これが決して重慶だけの問題ではない、というだけでは言い訳にならないであろう。中央政府の財政構造や全国諸都市の財政構造とともに問題として理解することは重要である。

所得再分配政策と「打黒唱紅」キャンペーンをどう評価するか

しかし、それでもやはり、この支出先が金持ち優遇のためのものであったのか、低所得者を助けるためのものであったのかは重要であるし、これだけ格差が問題となっている今ではそれが最も大きなイシューであると考えるべきであろう。そして、まさに、この点こそが「重慶モデル」において重視されていた点であった。薄熙来は日系企業など外資も重視しており、また、この地で南街村や華西村のようなことをすることはできない。ので、ここでできることは所得分配および再分配ということになろう。低所得者向けの公営住宅というものは日本では当たり前の政策でもあるのであるから、それが重慶で導入されても不思議ではない。薄熙来は「日本通」だからこそ、その政策を導入したのかも知れないとさえ思う。先の表の最下行にあるように薄熙来の政策は国有企業重視の政策であったという理解もある。それもそうであるが、やはり重点は「所得再分配」であったと理解してよいだろう。

したがって、この「重慶モデル(中国語では重慶模型)」を南街村や華西村の延長で議論することを不適切ということもできる。南街村や華西村では結局主要な生産手段が村民の所有となっていたのであるから、その意味で確かに「共産主義的」なところがあった。それに比べれば、ここ重慶では、「打黒唱紅」というスローガンによって暴力団とそれに結びついた腐敗分子の摘発が行われ、また市内のあちこちで住民が革命歌を歌っていたくらいである。中国国内の「自由主義派」ないし「右派」は「文化大革命を思い出す」というこ

とで大いに反発していたが、ここ重慶の「唱紅」運動と文化大革命の間には天と地ほどの距離がある。このことを私の友人で中国政法大学教授の楊帆氏(2009 年 12 月に京大で開催した「人間発達日中会議」にも参加された)はブログや著書で次のように述べている。すなわち、

① 「唱紅」運動は一種の大衆運動であるが、大衆運動がすべて文革運動というわけではない。
② 文革の基本的な誤りは法治を破壊し党や行政や大衆が恣に個人の自由を侵したことにあるが、重慶の「打黒(暴力団と腐敗分子の摘発)」は法律の破壊ではなく法律の有効な運用である。この活動には非常に多くの市民が実名で情報提供を行ない、法治の実質化に参加してその素質を引き上げている。
③ 「唱紅」運動についても文革当時との時代状況の違いを知らなければならない。人々は今ではもっと世俗化している。

である。

実のところ、この楊帆教授はあと 2 人の学者と『重慶モデル』という書物を 2010 年に書き、この分野の第一人者となっており、たとえば去年の 11 月にも重慶現地で国際会議を開いている。中国のネット上ではこの本によって「重慶モデル」を大きく世間に売り出す役割を担ったと評価されている「左派」政治学者であるが、それでもこのように文革との違いを強調するには、この「重慶モデル」がつぶされないために細心の注意が必要との考えがあったとものと理解される。実はこの 4 月にも楊帆教授の北京の自宅にお邪魔し、ほぼ同趣旨の意見をお聞きした。

というより、彼の言う「三種の左派」(旧左翼、新左翼と「文革派」)はこの重慶の成功をもってもっと左に中国を持って行こうと「イデオロギー闘争」を模索した。そして、その結果として「右派」と中央が危険視して実際に今回のような結果となってしまったとの意見である。格差解消がこれほど重要となっている現在の中国において、重慶の実験は客観的に見て非常に重要である。が、そうであるだけに今回の失脚は私としても非常に残念に思う。

しかし、それでも、楊帆教授の予想を超えて中央が危険視せざるを得ないほど、民衆の不満が蔓延しており、そのためにここまで争点となってしまったと見るべきだろう。左派の誤りというより、民衆が薄熙来を英雄にしようとしたのであって、実をいうとこれは文革にも似ている。つまり、民衆の支持があるから文革にも似、よって中央が危険視したのである。

したがって、この薄熙来を失脚させた共産党中央の今後に民衆は特別の注意を払うだろう。早くも『日本経済新聞』4 月 16 日付けは「汚職対策停滞も」との見出しを記事に掲げているから、もし今後汚職がひどくなれば、それが薄熙来の評価に再び繋がろう。また、これは格差の問題でもある。つまり、こうして共産党中央にこれまで以上に厳しい制約がかかり、顕在化してしまった路線闘争は激化の方向に進むであろう。もちろん、今後、汚職と格差が解消に向かうのであればこの闘争は激化しないが、解消に向かわない限り、今回の事件は対立の顕在化から「激化」に向かわざるをえないだろう。これが民衆の「民主化」圧力にもなるかも知れない。

ともかく、重慶の実験は、問題噴出の市場資本主義の下で「文革」すなわち「毛沢東」を多くの民衆に思い出させる機会となった。「毛沢東回帰」がひとつの大きな勢力として存在することを否定できなくなったとも言える。「西方化」と「中国化」の流れと対抗しながら、彼らの今後がどうなるか、目を離せない。

補足) 以上では薄熙来が重慶でしようとしたことのいくつかを述べたが、他にもいくつか特記すべき政策があったので、最後に紹介しておきたい。参考まで。

① 農村戸籍改革
都市と農村の「二元方程」の解消をスローガンに 2010 年から 1000 万人の農民を対象に農村戸籍の都市戸籍への切り替えを本格的に進め、すでに約 300 万人が移行している。これは全国に先行した改革で、農民は事実上私有化していた農地を市に返還して「国有化」を承認する代わりに社会保障など都市住民の権利を得るというもので、農民に大きな歓迎を受けている。現在、中国の「現代化農業」の多くは個人農業ではなく農場式の大規模農業となっているから、この農地国有化策もこの流れに合っている。それによって農業生産性は上昇している。
② 市の政策目標としての「幸福指数」の導入
2011 年に策定された市の 5 か年計画では市民の「幸福感」を国内で最も高い地区の一つにすることが明記された。薄熙来氏は 2011 年 3 月 6 日の記者会見で「高い GDP 成長率が単純に幸福を意味するわけではない」として、この趣旨を述べている。「民生重視」の政策の一環である。
③ 公有制経済、民営経済、外資経済の「三頭立ての馬車」

公有制経済を「車のかじ棒」と位置付けて他と区別しているが、民営経済や外資も重視している。外資としては大連市長、遼寧省時代に築いた日系企業とのパイプも強い。

④ 「内陸部唯一の国家中心都市」をめざす「5 つの重慶」政策
住みよい重慶、交通の便の良い重慶、「森林重慶」、「平安重慶」、「健康重慶」をスローガンとしたもの。市内交通の改善も重視した。イチョウ並木の造成は「森林重慶」の政策の具体化である。

⑤ 太平洋、インド洋、大西洋を結ぶ「三大洋戦略」
2009 年に重慶を訪問した際、この言葉に驚いたが、長江を伝って太平洋と繋がるだけでなく、昆明、ミャンマーを経由してインド洋とつながり、かつ蘭州、新疆経由でヨーロッパと繋がるという壮大なビジョンを描いている。内陸部開発には不可欠の視点であると思う。

⑥ 「大衆と同じものを食べ同じように住み同じように労働する」党の作風の問題

これは市の政策とは言えないが、新しい党の作風を作るということで、このようなことを呼び掛けた。より具体的には、苦しみを抱える大衆を訪問し困難解決の助けをするという「大下訪」、社会の基層に行き、村に行き、農家に行く。そこで彼らと同じものを食べ同じように住み同じように労働するという「三進三同」である。この「下訪」の中国語発音は「下放」と同じなので、文革を思い出させた可能性がある。意図的に似た発音のスローガンを作った可能性も大きい。

(本研究は日本学術振興会「アジア・コア事業」の一部である。)

****

【中国経済最新統計】

	①実質GDP増加率(%)	②工業付加価値増加率(%)	③消費財小売総額増加率(%)	④消費者物価指数上昇率(%)	⑤都市固定資産投資増加率(%)	⑥貿易収支(億ドル)	⑦輸出増加率(%)	⑧輸入増加率(%)	⑨外国直接投資件数の増加率(%)	⑩外国直接投資金額増加率(%)	⑪貨幣供給量増加率M2(%)	⑫人民元貸出残高増加率(%)
2005 年	**10.4**		**12.9**	**1.8**	**27.2**	**1020**	**28.4**	**17.6**	**0.8**	**▲0.5**	**17.6**	**9.3**
2006 年	**11.6**		**13.7**	**1.5**	**24.3**	**1775**	**27.2**	**19.9**	**▲5.7**	**4.5**	**15.7**	**15.7**
2007 年	**13.0**	**18.5**	**16.8**	**4.8**	**25.8**	**2618**	**25.7**	**20.8**	**▲8.7**	**18.7**	**16.7**	**16.1**
2008 年	**9.0**	**12.9**	**21.6**	**5.9**	**26.1**	**2955**	**17.2**	**18.5**	**▲27.4**	**23.6**	**17.8**	**15.9**
2009 年	**9.1**	**11.0**	**15.5**	**1.9**	**31.0**	**1961**	**▲15.9**	**▲11.3**	**▲14.9**	**▲16.9**	**27.6**	**31.7**
12 月	10.7	18.5	17.5	1.9	(30.5)	184	17.7	55.9	9.7	-44.6	27.6	31.7
2010 年	**10.3**	**15.7**	**18.4**	**3.3**	**24.5**	**1831**	**31.3**	**38.7**	**16.9**	**17.4**	**19.7**	**19.8**
1 月				1.5		142	21.0	85.6	24.7	7.8	26.0	29.3
2 月		(20.7)	(17.9)	2.6	(26.6)	76	45.7	44.7	2.5	1.1	25.5	27.2
3 月	11.9	18.1	18.0	2.4	26.3	▲72	24.2	66.4	28.1	12.1	22.5	21.8
4 月		17.8	18.5	2.8	25.4	17	30.4	50.1	21.3	24.7	21.5	22.0
5 月		16.5	18.7	3.1	25.4	195	48.4	48.9	29.3	27.5	21.0	21.5
6 月	10.3	13.7	18.3	2.9	24.9	200	43.9	34.6	8.3	39.6	18.5	18.2
7 月		13.4	17.9	3.3	22.3	287	38.0	23.2	12.8	29.2	17.6	18.4
8 月		13.9	18.4	3.5	23.9	200	34.3	35.5	21.2	1.4	19.2	18.6
9 月	9.6	13.3	18.8	3.6	23.2	169	25.1	24.4	12.2	6.1	19.0	18.5
10 月		13.1	18.6	4.4	23.7	271	22.8	25.4	8.7	7.9	19.3	19.3
11 月		13.3	18.7	5.1	29.1	229	34.9	37.9	28.1	38.2	19.5	19.8
12 月	9.8	13.5	19.1	4.6	20.4	131	17.9	25.6	9.2	-13.3	19.7	19.9
2011 年	**9.2**											
1 月			19.9	4.9	23.7	65	37.7	51.4	16.6	11.4	17.3	16.9
2 月		14.9	11.6	4.9	―	-73	2.3	19.7	-10.9	32.2	15.7	16.2
3 月	9.7	14.8	17.4	5.4	31.2	1	35.8	27.4	10.5	32.9	16.6	16.2
4 月		13.4	17.1	5.3	37.2	114	29.8	22.0	8.2	15.2	15.4	15.8
5 月		13.3	16.9	5.5	33.6	130	19.3	28.4	12.1	13.4	15.1	15.4
6 月	9.5	15.1	17.7	6.4	11.8	223	17.9	19.0	6.6	2.8	15.9	15.2
7 月		14.0	17.2	6.5	27.7	315	20.3	23.0	2.7	19.8	14.7	15.0
8 月		13.5	17.0	6.2	33.4	178	24.4	30.4	6.4	11.1	13.6	14.8
9 月	9.1	13.8	17.7	6.1	27.3	145	17.0	21.1	-3.5	7.9	13.1	14.3
10 月		13.2	17.2	5.5	34.1	170	15.8	29.1	-0.6	8.7	16.7	14.1
11 月		12.4	17.3	4.2	21.4	145	13.8	22.6	-12.9	-9.8	16.2	14.0
12 月	8.9	12.8	18.1	4.1	5.7	165	13.3	12.1	-15.4	-12.7	17.3	14.3
2012 年												
1 月				4.5	25.3	273	-0.5	-15.0	4.6	10.8	16.6	14.8
2 月		21.3		3.2	―	-315	18.3	40.3	38.7	-0.9	17.8	15.0
3 月	8.1	11.9	15.2	3.6	21.1	53	8.8	5.4	-6.5	-6.1	18.1	15.7

4 月		9.3	14.1	3.4	19.2	184	4.9	0.4			17,5	15.4

注：1.①「実質 GDP 増加率」は前年同期（四半期）比、その他の増加率はいずれも前年同月比である。
2.中国では、旧正月休みは年によって月が変わるため、１月と２月の前年同月比は比較できない場合があるので注意されたい。また、(　　)内の数字は１月から当該月までの合計の前年同期に対する増加率を示している。
3. ③「消費財小売総額」は中国における「社会消費財小売総額」、④「消費者物価指数」は「住民消費価格指数」に対応している。⑤「都市固定資産投資」は全国総投資額の 86%（2007 年）を占めている。⑥―⑧はいずれもモノの貿易である。⑨と⑩は実施ベースである。
出所：①―⑤は国家統計局統計、⑥⑦⑧は海関統計、⑨⑩は商務部統計、⑪⑫は中国人民銀行統計による。